

『道元禅師の生涯とその教え』

道元禅師が詠まれた歌として伝えられているものの中から二首

「峰の色 ^{タニ} 溪の響きもみなながら わが釈迦牟尼の ^{シャカムニ} 声と姿と」

(道元禅師は永平寺での修行生活を通して、永平寺と永平寺を取り巻く総ての環境に、釈迦牟尼仏の肉身と肉声を実感した)

「草の庵に ^イ 寝ても覚めても申すこと ^{ナムシャカムニブツ} 南無釈迦牟尼仏 あわれみたまえ」

(永平寺での修行生活のなかで、寝ても覚めても、ひたすら、身体いっぱい、心いっぱいで、南無釈迦牟尼仏を唱えていた)

「道元禅師」 ^{ドウゲンゼンシ} 曹洞宗の開祖 ^{ソウトウシュウ カイソ} 福井県 大本山永平寺のご開山 ^{カイソ} 正治二年(1200)～建長五年(1253) 53年の生涯

父親 内大臣久我通親公 (ないだいじんこがみちちかこう)
母親 摂政藤原基房公の娘 (せつしょうふじわらもとふさこうのむすめ)

^{テンダイザ} 天台座主 ^{コウイン} 公円僧正 (道元禅師は公円僧正のもとで得度出家)

三井寺 ^{コウイン} 公胤僧正 (道元禅師に栄西禅師の門を叩くよう勧める)

建仁寺 ^{ケンニジ} 栄西禅師 (栄西禅師「天台宗の僧であり、中国から禅宗の一派で臨済宗黄竜派という禅の新風を日本に伝えた優れた僧 建仁三年(1215)に死去」)

明全和尚 ^{ミョウゼン} (栄西禅師の弟子で道元禅師の師匠 師弟で中国に渡ったが、師匠の明全和尚は中国で客死)

天童山景德寺 ^{テンドウザンケイトクジ} 第三十一世 ^{ニョゾウ} 如浄禅師 (道元禅師終生にわたる大恩人・越格の禅将 但し、むしろ道元禅師により後世に名をのこした人とも云われている)

「身心脱落」 ^{シンシン タツラク} (身体とか心が、従来のあらゆる束縛から解放されて絶対の自由を得たこと)

「眼横鼻直」 ^{ガンノウビチョク} (眼は横に鼻はまっすぐ つまり自然そのものを云う)

「空手還郷」 ^{クウシュゲンキョウ} (何の土産もなく、空手で還って来た)

中国より帰国後、天福元年、34才の時、京都に興聖寺を建立
興聖寺=中国の僧堂を模範とした本格的な僧堂(坐禅堂も兼ねる)を造る ここで10年間坐禅の仏法を説いた。

道元禅師の執筆した本 「普勸坐禅儀」 「弁道話」 「学道用心集」
「典座教訓」 「正法眼蔵」 他

「正法眼蔵随聞記」 (道元禅師に師事した高弟の懷奘禅師によって
道元禅師の言葉をまとめ記述してつくられた)

寛元2年(1244) 道元禅師は越前に大仏寺建立 後に名前を
変えて現在の吉祥山永平寺となる
土地は六波羅にいた篤信者 波多野義重に
より寄進された

宝治元年(1247) 執権 北条時頼の招請により鎌倉に下向した
が翌年永平寺に戻る

平成十四年(2002) は道元禅師滅後七百五十年 大本山永平寺
で七百五十回忌大遠忌(だいおんき)が
全国曹洞宗一万五千ヶ寺の後援を得て
盛大に奉修されることになっている

「修証義」 (正法眼蔵を解りやすく説いた曹洞宗のお経 第一章か
ら第五章まである・葬儀・法事でとなえられている)

「発願利生」 (修証義の第四章・誓願を起こして、衆生に利益を与える
る)

「六道」 地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界

「四つの真実の知恵」
一つは 施すこと
二つは 優しい言葉
三つは 自分も他人も共に生きる
四つは 自分と他人の区別をしない

曹洞宗の大本山は二つある 両大本山(りょうだいほんざん)と
呼称する

福井の大本山永平寺(道元禅師により開かれた 父親の例え)

鶴見の大本山総持寺(道元禅師から四代目の螢山禅師により
最初能登に開かれた 明治三十一年山門
を残して全焼
明治四十年に現在地鶴見に移転した
能登には、現在祖院がある 母親の例え)

道元禅師は「自分のことより先に、他人のために良い事をせよ
しかも目立たないで、一生懸命尽くして行く事が
一番尊いことである」と説かれ、この精神を生涯
つらぬかれた。